

子どものアート活動における保育者の意味づけ
—療育施設での「おべんとう画用紙」プロジェクト実践から—

Meaning-Making through Art of Children with Special Needs:
Teachers' and Parents' Perspectives on Lunch Drawing Projects at the Child Development
Support Center

渡辺 涼子

要 約

This paper explores the impact of an art project of making lunch for children with special needs on their teachers' and parents' meaning-making. The study data was collected by interviews with experienced teachers and a questionnaire for teachers and parents who participated in a lunch drawing project in 2021. Qualitative data analysis revealed five meaning-making categories, of which the main ones were discovery of children's expressions by the teachers, and discovery of children's imaginative world by the mothers. Also, changes in approach to everyday childcare and how to make lunch were reported by the mothers. In conclusion, the teachers and mothers actively expanded meaning through children's artworks. Through further communication, the teachers and mothers explored what children really express/ want to express and this approach seemed crucial in making participation in the art project more active and led to a deeper understanding of children's art.

キーワード：アート、療育、保育者、おべんとう画用紙

1. はじめに

幼児期のアート活動の経験が、子どもの想像性や感情、科学的思考などの発達に大きな影響を与えることは、教育や発達研究の分野等で広く指摘されている（例：Vygotsky, 2005; Gardner, 1982; Eisner, 2002）。また保育実践では、近年、イタリア北部を起点とするレッジョ・エミリア・アプローチによる、アート活動の美的な側面 (aesthetic dimensions) を重視した数々のプロジェクト活動とその成果 (Vecchi, 2010) が、世界的な注目を集めてきた。

日本の保育においても、アート活動の重要性は、幼稚園教育要領や保育所保育指針等に

おける5つの領域のうちの「表現」において主に明示されている。幼稚園教育要領の第2章で「表現」とは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」活動として示され、幼児の内面の表現としてアート活動が位置づけられている。また保育者の役割は、「内容の取扱い」において「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」と記されている。すなわち、幼児の表現や表現し

たいものを理解し、表現を援助する者としての保育者像が提示されていると考えられる。

さらに療育が必要となる子どもたちにとっても、アート活動は、彼らの感情や経験を表現する「声」として重要であることが示唆されてきた (Taylor, 2005; Saldaña, 2016)。療育におけるアートは、主に「社会的自立、QOL の向上を目的とする『療育』の一手段 (石原&兼子, 2015, p.120)」として用いられ、子どもたちの内にある表現をどう引き出すかが重視される傾向にある。

一方で幼児のアート活動は、子ども個人の表現の表出に留まらず、アートを通して他者とどのように関わり自らの活動を変化させていくか、という社会的文化的発達にも深く関わるということが知られている (片岡, 2016; 堀田, 2020)。また宮崎 (2017) は、アート活動を子ども－世界 (アート作品)－保育者の対話的な三項関係として捉えること、そこでは保育者が子どもと対等の立場に立ち、保育者とは異なる「問い」を持つ者として子どもを捉え、子どもの「問い」を明確にすることが重要であることを論じた。すなわちアート活動では、子どものみならず、保育者が子どもや作品に対話的に関わり、子どもの「問い」や、子どもの持つ可能性を聴き取り引き出すことが、作品や活動を豊かにするという (佐木&宮崎, 2015)。

このように子どものアート活動の充実においては、保育者の能動的な関わりの重要性が指摘されており、アート活動を支援する保育者を対象に多くの研究が行われている。研究は、保育者のアート活動における実践知や支援方略を問うもの (和田, 2017; 島田, 2016) や、保育者と子どもの実際の関わりを分析するもの (佐木&宮崎, 2015; 大橋, 2016) 等があるが、日常の保育場面を対象とした研究が少なく、保育者にとってアート活動がどのような意味を持つかが明らかでないという問題が指摘されている (堀田, 2020; 大橋&高橋,

2020)。また対象となる保育者の殆どは、幼稚園や保育所に勤務する保育士であって、家庭で関わる親を対象とした研究は非常に少ないのが現状である (福井, 2002; 福井, 高橋&西山, 2005)。加えて療育の分野で、アート活動を通じた保育者の経験を扱う研究は、海外のものが散見される (Saldaña, 2016) が、国内の研究例は殆どみられない。

そこで本研究では、子どものアート活動に対する保育者の意味づけに注目し、療育場面でのアート活動を通じた保育者 (保育士・親) の経験や変化について明らかにすることを試みる。具体的には、療育施設でのアートプログラムの実践を通して、保育者 (保育士・親) が子どもやアート活動をどのように意味づけているかについて、質問紙調査やインタビュー調査より明らかにする。

2. 方法

2-1. 対象地

研究は、児童発達支援センターである浜松市根洗学園で行われた。登園は 1974 年に開所し、現在、2 歳から 5 歳の約 80 名の毎日通園児と、3 歳から 5 歳の約 120 名の並行通園児に対する療育、療育前早期親子教室や放課後等デイサービス、保育所等訪問といった専門家による支援サービスの提供を行っている。

また本園は、2008 年より音楽家や美術家などプロのアーティストを招聘し、「アートのじかん」「音楽あそび」「からだあそび」として、造形や音楽、身体活動を中心としたアートプログラムを園のカリキュラムの中に継続的に取り入れてきた。園の日常にアート活動を導入する理由として、園長の松本氏はアーティストとの関わりによって「日常的な支援だけでは見ることができない子どもの姿を職員が共に体感できる (根洗学園, 2022, p.3)」こと、さらにアート活動に従事することが職員たち自身の支援を振り返ると同時に自らが変化するきっかけに繋がること (Ibid., p.52)

等を挙げている。療育でのアート活動の多くが、子どもに対する治療的文脈や子どもの側の変化のみを対象とする傾向にあるのに対し、根洗学園は、子どものみならず保育者側の変化を含んだ活動としてアートに注目する点に、その特徴があると考えられる。

2-2. アートプログラムの概要

学園のアート活動のうち、本研究では美術家の深澤孝史氏が2009年に考案した「おべんとう画用紙」プログラムに着目した。「おべんとう画用紙」は、お弁当づくりを介したアート活動であり、(1)子どもが、保育者の説明のもと、お弁当箱の枠線が印刷された画用紙にお弁当の絵を描く、(2)描かれた子どもの絵を参考にして、親が食材を使って実際のお弁当を作る、(3)完成したお弁当を子どもに食べてもらう、というプロセスから主に構成される。ここでは子どもの絵や親の料理の完成度よりも、子どもの表現を保育者側がどのように読み解き、料理として親が再現するかという、作品を媒介としたコミュニケーションに主眼を置く。また美術家の深澤氏は、本調査のインタビューで、本プログラムは制作と対になる鑑賞に重点を置き、子どもの絵について別の見方を提示し、その見方自体を作品にする方法と説明した。この「おべんとう画用紙」発案以来、学園では年少の子どもたちを対象に毎年プログラムを実施しており、完成した作品（子どもたちの絵と母親のお弁当の写真）は、園内や市役所内、あるいは2014年、2018年、2022年に開催された大規模な展覧会の中で展示されてきた。

このように継続的に行われている「おべんとう画用紙」プログラムのうち、本研究は2021年7月から8月にかけて活動に参加した、年少組の2クラスに在籍する26人の通園児（2歳）の親と、クラスを担当した4名の保育士を対象者とする。実際の活動は、(1)保育士が、子どもたちに対してペープサート

を用いて説明をする、(2)説明後、クレヨンで所定の用紙にお弁当を子どもたちが描画する、(3)絵を家庭に持ち帰り、母親がお弁当を再現し、子どもたちと共に試食する、(4)母親が、お弁当の写真とコメントを保育士に提出し、保育士が園内にそれらを掲示し皆で鑑賞する、という流れで行われた。完成した子どもと大人の作品例は、図1に示す。なお、プログラムを初めて体験した家族は全体の約半数であり、残りの家族は二回目の経験であった。担当の保育士へのインタビューと当時の写真から、子どもたちは保育士による説明後、個々に集中して絵を描いていた様子が伺えた。

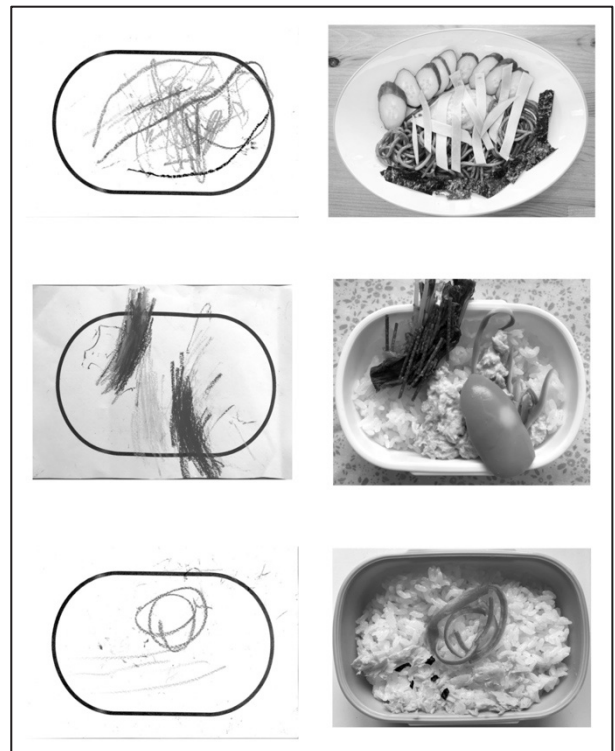


図1 子どもと大人の作品例
子どもの描画（左）と、描画をもとに作られた大人のお弁当（右）

2-3. 方法

親と保育士に対し、プログラムの経験やプログラムを通じた自身の変化について、2021年9月に自由記述式の質問紙調査を行った。加えて実際の活動の様子や質問紙の回答内容を確認するため、主担任であった保育士Aと

園長に対し、2021年11月に15分程度の非構造化インタビューを実施した。また保育士が現場で撮影した動画や写真（子どもたちの活動場面と完成した作品）も、親と園の許可を得た上で参考資料として利用した。さらにプログラムの目的や背景を知るため、アーティストの深澤氏にも、本プログラムの目的やプログラムの経緯等について、2021年11月に30分程度のインタビューを行った。

倫理的配慮として、保育士に対しては、本研究の目的と内容、プライバシー保護について文書と口頭で説明し同意を得た。親には、保育士からの説明に加え、質問紙に本研究の目的と内容、プライバシー保護について明記し、質問紙の回収を以て調査協力への同意を得たものとした。

2-4. 分析の観点

分析では、保育者が(1)プログラムを通して子どもや作品に対しどのような意味づけを行っていたか、(2)プログラムからどのような自身の変化を経験したかに注目し、回答を内容分析(Bengtsson, 2016)を参考に質的に分析した。

3. 結果と考察

質問紙の回収率は親(母親)が85%、保育士は100%であり、保育者の子どもや作品に対する意味づけでは、保育士では2つのカテゴリ(A・B)、母親では3つのカテゴリ(C・D・E)が抽出された。また自身の変化では、母親において2つのカテゴリ(F・G)が抽出された。

3-1. 保育士の意味づけ

保育士の子どもや作品に対する意味づけでは、(A)子どもの表現への驚き(2名)と(B)母親の作品制作への努力(3名)への言及がみられた。

(A)子どもの表現への驚きは、「①絵を描き

ながら、『にんじん』など、食材と色を意識できている子がいてすごいなと思いました」というように、描画を通して子どもが食材のリアルなイメージを表現したことへの驚きがあった。このような驚きは保育士Aとのインタビューでも、「②(驚いたことは)米粒一つ一つを白のクレヨンで一生懸命、描いていたこと」と語られており、保育士たちが子どもたちの描画活動や作品を通して、個々の子どもがイメージする世界を驚きをもって鑑賞したことが記されていた。

次に、(B)母親の作品制作への努力では、「③このお母さん、(お弁当づくりを)よく頑張っているなあ」、「④子どもたちが思い思いに描いたお弁当をお母さんたちが考えながら工夫して再現していたのがすごく印象的だった。青色のクレヨンはどう表現しよう...と悩むお母さんが着色料を使ったり、お弁当のカップで表現したりとお母さんそれぞれの個性が光っていて面白かった」等、親の作品から、個々の母親の苦労や努力、工夫について言及していた。

(A)と(B)のいずれの場合も、保育士が作品の鑑賞を通して子どもの表現や母親の思いに気づいたり想像する過程がみられた。一方、自身の変化については、保育士全員が母親側の変化(例:母親の弁当作りの変化や、作品の展示による他の親との交流)を取り上げる傾向にあり、自らの変化に関わる記載は見られなかった。これは保育士たちが、「おべんとう画用紙」を子どもと母親のためのプログラムと捉え、母親側の変化に主に注目していた可能性が考えられる。加えて、プログラムの手順がアーティストによって発案・整理されていることから、他のアート活動に比べて、保育士がプログラムに参加する余地が少ないこともその一因として想定された。

3-2. 母親の意味づけと変化

母親の回答のうち、子どもや作品について

の意味づけでは、(C)自身の作品制作の楽しさと困難(18名)、(D)子どもの想像世界の発見(7名)、(E)子どもの作品の変化と成長(3名)の3つのカテゴリが抽出された。

(C)自身の作品制作の楽しさと困難は、母親が自分の作品(弁当)の制作過程を、楽しんで難しさを感じたことについての記述である。例えば、「⑤最初は何かさっぱりわからないので悩みましたが、色や形を見ておかずを考えるのが楽しかったです」、「⑥まだ言葉がでていないので、全てを想像で作らないといけないので、大変でした。しかし、Kちゃんがどんな気持ちでおべんとうを描いたのかな?とその光景を想像する時間は楽しくもありました」等、作品づくりに困難を感じたと同時に、それが楽しさへつながることを13名の母親が指摘していた。楽しさ、もしくは困難のみを指摘した回答が、それぞれ3名と2名であったのに対して、困難と楽しさの両方への言及が多かったことは、子どもの作品が「わからない」ことが困難を感じさせると同時に、想像(創造)の楽しさを生み出していたことを示唆する。

(D)子どもの想像世界の発見では、子どもの作品に描かれた世界についての母親の気づきが述べられ、作品世界を理解しようとする母親の活動も合わせて記載されていた。例えば、「⑦子供が何を書いたのか、好物からわかる食材もあれば、謎の部分もありました。本人に聞いたところ何か教えてくれたので、少しは子供の思い描いたお弁当に近づけて作れたのでは、と思っています」、「⑧うまく絵では表せなくても(子どもの)頭の中ではお弁当ができていて『これは何?』と聞くと、『おにぎりだよ』と教えてくれました」といった記述があり、子どもが作品の中で「何を表現したか」について、お弁当という枠組みを用いて子どもに問い、子どもから教わることで母親が理解を深める過程が記されていた。

さらに(E)子どもの作品の変化と成長とは、

作品の鑑賞を通した、子どもの作品の変化や子どもの発達への気づきであり、プログラムの参加が2回めの母親による言及が多くみられた。例として、「⑨前回より絵もパワーアップして、色んな色のおべんとうの成長がわかる」、「⑩去年も同じことをしましたがその時よりも色が一色だけではなく3色も増えてちゃんと食べ物の色を覚えているんだと実感しました」等、初回の作品との比較から、母親全員が子どものポジティブな変化に注目していた。

また母親自身の変化については、(F)子どもへの関わり方の変化(10名)、(G)自身の「弁当」観の変化(3名)のカテゴリが抽出された。

(F)子どもへの関わり方の変化は、プログラムの参加後、子どもへの日頃の関わりが以前と異なることへの言及を指す。例としては、「⑪たまに子どもが絵を描いていても今までは一方的に「上手だね」としか言っていませんでしたが『何を描いたの?』『これは三角だね』(中略)と話をするようになりました。他の遊びでも(中略)『一緒に作ろう』『ここはどうしたらいいと思う?』と声をかけるようになりました」等、子どもへ問いかけたり、子どもの思いを想像して関わるように変化したという記述がみられた。また2名の母親は、「⑫いつも忙しくて、じっくり娘と向き合う時間がとれていなかったな、と思いました。おべんとう画用紙をきっかけに、食事中も娘に食材をみせながらお話したり、少し意識が変わりました」等、自分自身のこれまでの関わり方を振り返る回答を行っていた。

(G)自身の「弁当」観の変化とは、プログラムの経験後、母親の弁当づくりへの意識や作り方が変わったことの記述である。「⑬子どもが喜んでくれるよう見た目なども意識するのは大事だなと思いました」、「⑭普段なら食べない物も食べたので、見た目や目先をかえると食べてくれるかもと思い、出来る時には見た目に気を配ったりしています」といっ

た回答内容から、作品制作の経験がその後の日常的な弁当づくりに影響を与えたことが示唆された。

4. まとめ

結果から「おべんとう画用紙」プログラムでは、保育士と親は子どもの作品の鑑賞を通して、子どもが表現した／表現したい世界を探り意味づけながら、子どもと関わろうとする傾向がみられた(カテゴリ A・C・D)。とりわけ親の場合、親自身の作品制作のために子どもの作品を積極的に解釈する必要があり、さらにその解釈が容易ではないことが、作品制作の楽しさ(カテゴリ C)や子どもへの問いかけや関わりを生んでいた(カテゴリ D)。

言い換えると、作品を通して子どもが何を描いているか(=どんなお弁当か)の答えは子どもしか知らないため、母親の答えの追求や子どもから答えを「教わる」機会が生じており、それが母が「教え」子が「教わる」という日常的な関係性に変化をもたらす契機となっていた。これは宮崎(2015)が示す、保育者が子どもの作品を通して「問い」を持ち、子どもの持つ可能性を聴き取る活動に近いと考えられるだろう。また、こうした関わり方を変える経験が、プログラム後も保育者の子どもへの関わりや作品(弁当)制作に影響を与えたり、自身の関わり方の問い直しにつながることを示唆された(カテゴリ F・G)。

すなわちプログラムでは、子どもと保育者が作品の鑑賞と制作を通して関わり合い、関わりを通して作品の意味づけや制作を行っていたという点で、子ども—アート作品—保育者の対話的な三項関係の成立が想定された。また「お弁当」という作品を媒介にして、子どもの表現を意味づけながら母親が自らの表現を生み出す過程は、「子どもの表現を自らの表現の可能性として受け取り、そこで理解された意味を、自分と他人に共通のことば、あるいは伝達可能な行為に移すこと(津守、

1987, p.15)」という、子どもへの理解を深め子どもの表現をより豊かに展開する活動としても意義を持つと考えられる。

最後に本研究の課題として、アート活動への保育者の意味づけを、質問紙調査と2名の保育士へのインタビューのみから明らかにしようとした点が挙げられる。これは調査時の感染症流行により、アート活動の観察や家族へのインタビュー調査が困難になったことに起因するが、質問紙の回答内容と、実際の子どもや保育者の活動との関係を探るためにも、可能な範囲での観察調査やインタビューの遂行が望まれる。また対象者が、2021年度のプログラム参加者のみに限定されていることから、他年度の参加者への調査など、継続的な分析も必要である。特に「(E)子どもの作品の変化と成長」のカテゴリで示されたように、保育者のプログラム経験の積み重ねが、作品や子どもの理解を深める可能性については、一層の検討が必要であると考えられる。

注

- 1) 当プログラムの詳細は、<https://obentogayoshi.com/>を参照のこと。

引用・参考文献

- Bengtsson, M. How to plan and perform a qualitative study using content analysis. (2016). *NursingPlus Open*, 2, 8–14.
- Eisner, E. W. (2002). *The Arts and the Creation of Mind*. Yale University Press.
- 福井晴子. (2002). 幼児の描画活動を援助する家庭造形環境の実態. *美術教育*, 285, 16–25.
- 福井晴子・高橋敏之・西山修. (2005). 親子の折り紙遊びを通じた家庭における造形活動への支援と効果. *美術教育*, 288, 40–47.
- Gardner, H. (1982). *Artful Scribbles*. Basic Books.
- 半田結. (2017). 芸術療法的視点を取り入れ

- た保育実践の可能性. 関西福祉大学研究紀要, 20, 15–24.
- 堀田由加里. (2020). 保育における幼児の描画に関する研究の動向と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 59, 253–260.
- 兼子一・石原みどり. (2015). エンパワメントとしての市井のアートセラピー活動 - 全国実態調査から見えるその内発性と自律性. 心の危機と臨床の知, 16, 105–130.
- 片岡杏子. (2016). 子どもは描きながら世界をつくる: エピソードで読む描画のはじまり. ミネルヴァ書房.
- 宮崎清孝. (2017). 「主体性が育つ」場としてのアート教育の対話的授業論からの検討. 平成 27～30 年度科学研究費助成事業研究成果報告書.
- 大橋麻里子. (2016). 幼児の生活画の活動における保育者の援助に関する研究 - 導入時の援助の方略とその意図の分析を通して -. 美術教育, 37, 161–177.
- 大橋麻里子・高橋敏之. (2020). 保育実践における描画活動を対象とする研究の動向と課題 - 生活画に焦点を当てて -. 美術教育学研究, 52, 89–96.
- 佐木みどり・宮崎清孝. (2015). はっけんとぼうけん: アートと協働する保育の探求. 創成社.
- Saldaña, C. (2016). Children with Disabilities: Constructing Metaphors and Meanings through Art. *International Journal of Special Education*, 31(1), 88–96.
- 社会福祉法人ひかりの園浜松市根洗学園. (2022) 社会福祉法人ひかりの園 浜松市根洗学園式アートプログラム入門ハンドブック. 社会福祉法人ひかりの園浜松市根洗学園.
- 島田由紀子. (2016). 造形活動に関する保育者の意識 - 保育系学生との比較検討 -. 和洋女子大学紀要, 56, 85–97.
- Taylor, M. (2005). Access and Support in the Development of a Visual Language: arts education and disabled students. *International Journal of Art & Design Education*, 24(3), 325–333.
- 津守真. (1987). 子どもの世界をどうみるか: 行為とその意味. 日本放送出版協会.
- Vecchi, V. (2010). Art and creativity in Reggio Emilia: Exploring the role and potential of ateliers in early childhood education. Routledge.
- ヴィゴツキー L. S. (2005). 教育心理学講義 (柴田義松・宮坂瑠子訳). 新読書社.
- 和田美輪. (2017). 幼児の描画指導において保育者は自らの実践をどう捉えているか. 教育科学研究 (東京都立大学大学院人文科学研究科教育学分野編), 31, 21–33.

謝 辞

本研究にご協力いただいた浜松市根洗学園の松本園長、先生方、子どもたちと保護者の皆さまに心より感謝を申し上げます。